

「環境紙芝居で総合学習へ出前公演」

高崎市 奈賀 由香子



「南極ペンちゃんの、地球があっちっ！！」紙芝居が始まると、子どもたちは食い入るように見つめます。子どもたちは紙芝居が大好きです。

今年の3月11日、明和町にある明和西小学校で、5時間目と6時間目をもらった4年生の総合学習の時間、環境紙芝居による出張公演。この日のテーマは地球温暖化についてでした。南極に住むペンギンのペンちゃんがある日気がついてみると、氷ごと流されてしまっていたので泣いているペンちゃんを見つけたアツシ君とお母さんが「いったいどうしたの？」と問いかけ、ペンちゃんが地球温暖化の現状について語り始めます。

「じゃあ、どうして温暖化が起こったの？」遠い世界のお話のように聞いていたアツシ君とお母さんは、自分たちにも関係があると知ってビックリ！「じゃあ、ぼくたちはどうしたらいいの・・・？」と、お話は進みます。紙芝居の最後では、小学生にもできることがたくさんあるよ、温暖化を止めることができるんだよ、などと希望を持って取り組めることがたくさん提示してあります。見終わった子どもたちは、「へえー」とか「それ知ってる！」とか、にぎやかです。

紙芝居が終わったあとは、今の紙芝居に関する「ウルトラクイズ！」。体育館を半分に区切って分け、「第一問、今の紙芝居に出てきたのは、ペンギンでしょうか、白熊でしょうか？ - 1番ペンギン、2番白熊、さあどっちだ！？」すると約100人の子どもたちは、さっきまで大人しくしていたので体がムズムズ、元気良く1番を目指して走っていきます。問題は徐々に難しくなっていきますが、子どもたちはしっかり内容を聞いていたようです。全問正解した子がかなりの数いました。

終業のチャイムになると、子どもたちは着ぐるみのペンギンを取り囲んで大喜び。中には、真剣に質問をぶつけてくる子もいて、こちらも驚くことがたくさんありました。子どもたちにとっては、印象に残る授業になったようです。

今年度は中学校でも、総合学習によんでいただきました。紙芝居は好評で、環境問題という内容については、より深く理解してもらえました。もちろんウルトラクイズは小学生よりレベルアップした内容です。

この紙芝居は、私たちボランティア仲間の小学生から大人まで皆で作りました。私たちは環境と平和のNPOで活動しているので、紙芝居のテーマは「環境」です。日本で環境への取り組みが遅れているのは、現状や原因について知らないからなのではないか、それなら学校教育の中に取り入れてもらったらどうだろう？でも、環境の話は難しくなりがちです。そこで、紙芝居なら子どもたちも聞いてもらいやすいんじゃないか、ということで紙芝居製作が始まったのが、去年の7月。地球温暖化がテーマの「地球があっちっ！！」を製作、全国の仲間呼びかけ、申し込みのあった地域にコピーを配布して活用してもらっています。そして今年は第二弾としてオゾン層破壊がテーマの「UVはアブイ！」を製作しました。

製作過程では、小学生、中学生にも参加してもらいました。まず、テーマ(地球温暖化やオゾン層・紫外線)からイメージすることを全員に小さな紙片に何枚でも書いてもらい、それをもとに構成を作ります。おおまかな筋が決まったところで、子どもたちが主役となって、絵を描いてもらいます。この時点で大人は「こんな風に描いてね」とイメージを伝えるだけ。子どもたちはそのイメージを具体的に生き生きと描き始めます。下絵ができた

ところで、色をつけていきます。ここでも子どもたちは楽しく参加します。大体の絵が出来上がったところで、大人は集めた資料をもとに、紙芝居の絵にグラフを足したり、写真を入れたりします。最後に、紙芝居の文章を考えて、完成です。

私たちはあまり時間をかけずに作ってしまいましたが、資料集めから、全体の流れ、テキスト制作まで全部子どもたちでもできることです。学校でも授業の中で取り組めるのではないのでしょうか。紙芝居だけではなく、劇の台本を作って上演するなど、ひとつのものをみんなで作り上げるという体験をしてほしいな、と思います。

ただ、実際取り掛かるとなると、完全創作以外は、資料集めの段階から下調べが大変なことが多いです。紙芝居をひとつ作るだけでも、実にたくさんの資料が必要ですし、それがいろんな分野に関連してきて、そこから全体を見渡すという作業の繰り返しですから、ひとつの事柄がいかに多くの社会的要素を含んでいるかがよく分かります。学校で習っていることは、実社会の中で応用され形を変え、こんな形で関係しているのだということが分かるでしょう。実社会とのつながりが分かれば、自分たちの勉強しているものが何なのか、興味が出てくると思います。

先生方にしても、やってみたいけれども、学校だけでは手が足りないし時間も余裕もない、というところが多いでしょう。そんな時、地域で協力できる人が必ずいます、ぜひ探してみてくださいと思います。学校という場を、閉ざされた空間にするのではなく、地域に開かれた場所として、いろんな大人たちと接触することによって、実学となり、学校で習っていることの意味が分かってくるのではないのでしょうか。

私たちは幼稚園の父母会でも紙芝居を上演してきました。そのたびに聞かれたのは、「学校でもやってほしい」「先生方にも見せてほしい」「行政の人にも見せてほしい」という声でした。環境という問題は、大事でありながらあまり事実が知られていない、ゆえに、後回しにされてきた分野だと思います。特に学校の中ではほとんど触れられてこなかったのではないのでしょうか。環境先進国といわれるヨーロッパの国々では、ゴミの分別の仕方を学校で実習する、ダイオキシンがどのような背景で出てきてどのような害をもたらすのかが授業の中で扱われる、といったことが普通に行われています。子どもの中からこのように、環境問題が身近なこととして、学校や家庭で当たり前に取り上げられていることが、良識ある市民を作っていくのだと思います。さらに、それは行政を動かしていけることとなるでしょう。

環境問題というのは、決して個人だけの問題ではなく、世界共通の問題と言えるでしょう。この社会で共存共生していくためには、自分のところだけ良ければよい、とは、もはや言っていられない状況にあります。他の地域、国々のことも考えられる広い視野と、データを読み解く力、何が問題なのかを考える洞察力、こういったものが環境問題を考える上では、必要になってきますが、残念ながら今の学校教育では、まさにこの部分が欠落しているように思います。まさに、環境を考えるというテーマは教育の素材としても、実践の場を作るということに関しても、人間性の幅を広げるのに大いに役立つことだと思います。

環境について学ぶということは、まさに「総合的な学習」が実践できるテーマだと思います。たとえば、自分の地域ではどうなっているのだらうと役所へ出かけて行って調査し

てみたり、地域の人に話を聞く。あるいはほかの国ではどうだろう？と、地図で場所を調べる、その国の現状・そこに至る歴史を調べる、国連のデータを調べてみる、英語のものは訳してみる、自分で実験をしてみる、自分で図やグラフを作ってみる、どこかと対比して割合をだしてみたり、まとめのレポートを書いたり、といろんなことができます。

先生方が答えを持たずに、自分たちに調べさせる、その道のプロにヒントをもらいにいく、役所へ行って地域の人と触れ合う。そんなことができていったら、学校の中だけではなく、その地域もどんなに活性化するでしょう。生徒たちが「教えてください、資料見せてください」と役所へ行ったら、行政の人だって一所懸命にならざるを得ないでしょう。

日本の子どもたちは「自分で考えて何かをする」ということが非常に苦手なように思います。また、自分の国や地域についても、基本的なことすら知らないことが多いようです。なぜそうなのでしょう？それは自分と関わりがない、と思っているからではないでしょうか。自分と関係ないことには興味ももてないでしょう。何のために学校で勉強するのか、また学校で勉強していることは何なのか、今の自分とどう関係があって、どのように将来へつながっていくのか、ということがわかると、「君たちが未来を拓く」という言葉が、単にお題目としてではなく実感として受け取れるようになるのではないのでしょうか。

学校の中で完結するのではなく、どんどん地域と交流していくこと、その中から、学校だけでは足りないものが補えると思います。自分の地域だけではなく、広く県内には、素晴らしい人材がたくさんいます。環境問題に関して言えば、その道の大家という方がたくさんいらっしゃいます。私たちのようなボランティア活動している団体もたくさんあります。ぜひ、生徒たちにいるんな大人と触れ合う機会を作ってほしいと思います。

そのほかに、身近にいるお年寄りというのは、実は知恵の宝庫なのです。彼らは知恵があって時間があって余裕があります。日本人としてのアイデンティティーをもっていらっしゃいます。伝統やその地域のことに詳しいです。こういう方々にも、ぜひ学校でお手伝いしてもらってはどうか。

環境問題はぜひ総合学習の中に入れてほしいテーマです。年度別、あるいは学年別、クラス別に設定しても、テーマは限りなくあります。それに、地球温暖化、酸性雨、オゾン層破壊、森林破壊、食料汚染、ダイオキシンなど、どれも実は身近なことばかりなのです。新聞で日本の食糧自給率が28%（穀物換算）ということを読んだとしても、その数字が示す意味がわからなければ、自分の問題として考えられないでしょう。いかに、身近なものとして物事を考えられるか、自分のことだけではなく、ベッカムの国ではどうか、など広い視野をもてること、そして、自分にもできることがある、実践の場が地域にある、そしてそれは実際の地域において有用なこととなるのです。

私たちは紙芝居という手段で、知らないことを知ってもらおう、興味をもってもらおう、と働きかけています。小学校ではペンギンの着ぐるみを着て興味をもたせたり、生徒の多いところでは紙芝居をOHPで見せたり、大人の集まりではさらに深くお話をさせてもらったりしています。専門家の紹介もしますし、講師も派遣します。

学校という場所に、先生以外の人生の先輩たちが訪れることで、教え育てる知恵が集まってくるだろうと思います。どうぞ、人材を活用していただきたいと思います。

# 南極ペンちゃんのUVはアブイ

